

中学校における学級経営の改善に関する研究(2)

構成的グループ・エンカウンターを導入した学級経営が
学級の生徒の学力に与える効果の研究

縫部 義憲 菅野 信夫 今川 卓爾 荒谷美津子
作田 武夫 松尾 砂織 二畑 芳信

I 研究目的

昨年度の共同研究において、共同研究者である広島大学の縫部(1986, 1987, 1989 a, 1989 b, 1999, 2001, 2002)の先行研究および、われわれの共同研究の中から、昨年度の研究の課題と今年度の研究の方向ともなる有益な示唆を得た。それは、「学びの準拠集団としての学習集団と自立的な学習者の育成に必要と考えられる4つの領域(下記参照)を統合すれば、当該集団と学習者に学習動機と学力形成に有効となるであろう。」というものである。その4領域とは、①認知領域、②情意領域、③精神運動領域、④相互作用領域、の4つの領域である。従来から提唱されている、認知と情意の統合に加えて、精神運動領域と相互作用領域を加えた4領域のことである。この4領域を統合しつつ育成された学習集団の構成員に形成される学力の状態を明らかにすることが、今年度の研究の目的である。

II 分担研究(その1)

縫部は、学びの準拠集団としての学習集団と自立的な学習者を育成するために、「人間づくり」を提唱する中で、次のことを指摘している。

生徒が本来持つ成長の欲求が、自己像を明確にしながら、自我の確立を模索する。そのときに、学びの準拠集団として育成された学習集団が重要な役割を果たす。その役割とは、「自他の関わり方と相互交流」である。つまり、他者を介して自己の本質に気付くことで、自己の学ぶべきことがらや進むべき道筋が見えるのである。これを実現するため、不可欠と考えられるのが、相互作用領域における学習者相互のリレーションの形成である。このリレーションの形成が、学習者に安心して自己の学習課題を表現できる環境をもたらすのである。

これらの縫部の示唆から得た、次の仮説を検証するために、以下の研究をおこなった。

研究仮説：学級集団内にリレーションを形成すると、学習者の学習動機が高まり、学力が向上するであろう。その際に、どのような手立てが有効であるかを調べる。

〔ケースの概要〕

対象となるアセスメント集団の状況は、下記のとおり。(1)①対象グループは、平成13年度入学第二学年81名。(2)グループ内の特徴は、昨年度の共同研究第29号2002. 3の21項を参照のこと。(3)グループは、41名の第一グループ(以下1g)と40名の第二グループ(以下2g)で構成された。(3)生徒の特徴は、①学習への内発的動機は、平成14年1月28日に実施した5教科(国、社、数、理、英)のCRTスコアによると、各教科の各観点の到達状況は全国通過率と同程度であるが、部分的にはそれ以下もあり、十分形成されているとはいえない。②学力水準の傾向は、平成14年5月1日に実施した5教科(国、社、数、理、英)のNRTスコアによると、1g全体の平均得点は56.5。その内、男子は57.1、女子は55.9であった。2g全体では、56.6。その内、男子は56.8、女子は56.4であった。この時点の学力の状態は、1gと2gは同程度かわずかに2gが上回っていることが分かる。

〔方法〕

今年度は、上記の2つの学習集団のうち1gで、構成的グループ・エンカウンター、キャリアガイダンス、ソーシャル・スキル・トレーニングを実施し、心の教育を行った。心の教育とは、生徒に思考・感情・行動の3領域にける「反応」の仕方を学習させ、「他人に迷惑をかけない限り、自己のありたいように生きる。」ことの意味を体験的に学ばせることである。リレーションの形成をめざして、4領域の統合を意図的にす

T：うんうん。時々一緒に練習しましょう！！

5. 保健室と担任との連携

生徒は保健室でいろいろな悩みを相談したり、様々な姿を見せる。担任と養護教諭が連携することによって生徒の理解を深めたり、担任と生徒の信頼関係が高まるような働きかけを促したりすることが大切である。また、チームティーチングとして学級経営に参画することによって個への対応だけでなく、集団指導に関わることも学級形経営上の効果は大きい。複数の者が関わることで個に対応しやすくなったり、集団の共有する時間や関わりの方の向上に期待が持てたりする。

6. 今後の取り組みに向けて

昨年度は構成的グループ・エンカウンターを用いて集団の中で自分を見つめ、他との望ましい関係作りに主眼をおいた。

今年度は保健室における個の関わりの中で、自分の行動や価値観に気づきを深め、自己肯定感やソーシャルスキルを高める為の支援を試みてみた。しかし個への関わりには限りがある。生徒同士が互いに関わり、良きアドバイザーになることが出来るようにピアカウンセリングの手法を取り入れた取り組みを更に追究していきたいと考える。

分担研究（その3）

「日常生活の中から学習課題を設定し、子どもたちが学びたいという意欲を高める指導」～「相似の利用」の授業を通して～

1. はじめに

これまでの学習指導を振り返ると、依然として教師主導で、画一的に知識や技能を教え込む、固定化された指導の傾向が強かったように思われる。その結果として、生徒は「なぜ数学を学習するのか」「数学の勉強は何の役に立つのか」という疑問を持ってきた。また、数学の有用性や美しさ、学ぶことの楽しさ等が十分味わえないまま学習が進められてきたことは否めない。

さらに、問題解決の仕方を考えさせるときに、理解の速い生徒の発言によって進行してしまい、他の生徒の出る幕がない場合もある。また、いろいろな解決の方法がある問題でも、少し難しくなると理解の速い生徒の活躍場面の連続になったりすることもあった。

そこで、学習した内容を実生活の事象に結びつけたら、実生活から数学の問題を見いだすことで数学の有用性を実感でき、数理化していく過程で、さらに理解を深めさせることができると考える。

2. 授業の構想

学習意欲を高める条件として、①生徒にとって学習の必要性・必然性があること、②生徒の生活経験や実態に即し、身近に存在するなどの現実性があること、③満足感、充実感、成功感等を体験でき、興味・関心を高め、持続するものであること、④生徒にとって驚き、不思議さ、新鮮さがあり、解決にあたって多少困難性があること、⑤多様な考えができ、発展性があること。

日常生活の中から題材を考え、直接測定できない距離を相似の考えを使うことで求められるなどの活動を通して、数学的活動の楽しさや数学的な見方や考え方のよさを味わい、相似の考えを進んで活用してみようという態度へとつなげたい。理論だけでなく、距離や角を実測などの作業によって求め、それをもとに縮図を作成し、必要な高さや距離などを求めることに挑戦させるなどの数学的な活動を取り入れたり、相似を使ったいろいろな活用を紹介したりしたい。

そのように考え、10月「相似な図形」という教材を使い3年生の授業を行った。

3. 教材観

三角形の相似条件を基にして相似な図形を確かめることは、合同から相似へと視野を広げ、「大きさ」と「形」からなる図形の性質を整理する。また、未知の部分の長さを求めるといった活動に、相似条件による論証を活用し、論理的に考察する力を伸ばすことに意義がある。

相似の考えは、直接測定することが困難な2地点間の距離や高さを求める時のように日常生活の中で活用しやすく、数学の有用性を実感できる教材である。

4. 生徒の実態

学習課題によっては意欲的に取り組む生徒が多く、全体的にまじめに授業を受けており、挙手も多い。しかし、証明の必要性や意義が理解できていない生徒、実際の問題解決に当たってその考え方や証明の記述の仕方が身につけていない生徒や結果を性急に求めるあまり、考えた過程やその背景にある数学的な見方や考え方のよさに十分着目しない傾向が見受けられる生徒もいる。

5. 授業の構想

(1) 単元の目標と計画

①単元の目標

- ・図形の相似の意味を理解し、「三角形の相似条件」を用いて図形のもついろいろな性質を論理的に調べることができるようにする。
- ・三角形の相似条件を利用して、平行線と線分の比についての性質や中点連結定理などを見いだ

- し、それらを確認することができるようにする。
- ・相似の考えを活用し、直接測定することが困難なもの距離や高さを求めることができるようにする。

②計画

- 第1次 相似な図形
- 第2次 三角形の相似条件
- 第3次 平行線と比
- 第4次 相似の利用

6. 授業の実際

	生徒の活動	教師の働きかけ
第1時	1. 簡易則高器の仕組みを知る。 簡易則高器を2種類つくる。	・相似の証明をし、高さの求め方を理解させる。 ・行き詰まっている生徒には、教科書の問題を参考にしよう助言する。 ・いろんな証明の仕方についても考えさせる。
第2時	1. 簡易則高器を使って教室の天井の高さを測る。 2. ポールの高さを予想し、実際に測定する。 3. 測定する場所を決め、いろいろな高さを測る。	・簡単な測定の仕方に気づかせる。 ・測定結果と図を書かせる。 ・わかりやすいまとめ方や発表の仕方について助言する。
第3時	1. 各班の測定場所を発表する 2. 測定結果を使って高さを求める。 ・いろんな測定の仕方を知る。	・測定の仕方の同質性や異質性に気づかせる。 ・いろんな求め方を考えさせる。

7. 生徒の感想

- 実際にはかれないものが簡単につくった物で、簡単にはかれるのに驚いた。
- 数学で習ったことを使うということはあまりなかったけど、相似を利用して普通に測るのは難しいものも測れることがわかった。

8. おわりに

日頃、高さの感覚が不足している生徒が多く、高さというものに目を向けさせ、相似を活用すればこんな簡単な道具で高さを測れることのすばらしさを感じさせることができた。また、制作や測定の場面で生徒どおしの関わりや工夫がみられた。わかるから使える、逆に使えるからわかるという関係をもっと大切にしていこうと、活用のさせ方の工夫をしていくことが今後の課題である。

分担研究(その4)

「学習を共有化するための手だて」～コミュニケーション活動を通して～

1. はじめに

教育的効果の高い学習集団を育成する条件を探る本研究は2年目を迎えた。英語科では、人と人がかわり相互理解を深める中で、お互いの気持ちや考えを伝え合うことを中心としたコミュニケーション活動と、知識・理解を深め、定着を図る活動のバランスをとりながら学習指導を行ってきた。少しずつではあるが、次のような生徒の変容も見られるようになった。

- ①発表活動に積極的で、生徒同士がよさを認め合う

姿が見えるようになってきた。

- ②表現活動が発展性のあるものになってきた。

一方、生徒の中には「英語に対する苦手意識」を持つ生徒もおり、それを払拭するまでに至っていない。あるいは「なぜ英語を学ぶのか」「学校では受験英語だけをやりさえすればいい」という考えから、コミュニケーション活動に意味を見いだせない生徒もおり、必ずしも教育的効果の高い学習集団であるとは言えない現状がある。このような学習集団にあっては、言語の使用状況を理解できないまま、形式的に基本文型を暗記するだけにとどまるだけでなく、発展性に欠け、学習の共有化もできにくいと考える。

2. 生徒につけたい力とは

学習指導要領によると、外国語の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的なコミュニケーション能力の基礎を養う」とある。文法や語彙などの知識面の学習だけを重視するのではなく、言語の使用場面を考えた運用ができる力を高め、その言葉の背景にある異文化を理解しようとする態度を育てることが、実践的なコミュニケーション能力の基礎を築くことになる。このコミュニケーション活動に英語学習の意義を見いだせない生徒は、何を望んでいるのだろうか。そこで、生徒の考える英語学習に望むものを探るために外国語学習に対する意識調査を実施した。

- (1) 調査内容

調査対象：本校3年生81名

実施日時：2002年 9月30日

(2) 調査項目

次の5つの項目を設けて質問をした。

①外国語学習をする際に、あなたがもっとも身につけたいあるいは重視したい技能は何ですか。複数回答をする場合は、順位を書いてください。

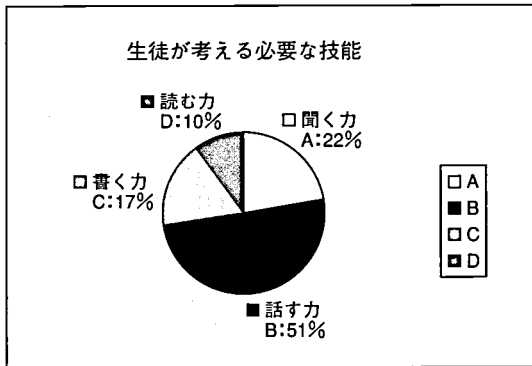
(A:聞く力 B:話す力 C:書く力 D:読む力)

2. 1を選んだ理由を書いてください。

3. 1で選んだ力を伸ばすために必要だと思われる学習内容を書いてください。

4 A) What do you expect for language learning in your school?

4 B) What skills or abilities do we need when we understand the international communication?



(3) 生徒の回答

本調査では、51%の生徒が学校で身につけたい技能は「話す力」と「聞く力」の伸長だと回答した。その力をつけるために必要な学習方法として以下のように回答している。

(生徒の回答一部抜粋)

先生の英語を聞いてからALTとの授業にのぞむ。実際に外国人と話をしたり、リスニングをがんばる。使用頻度の高い会話を身につけ、英語を使って話す。発音練習や単語を暗記する。この前授業でやった電話の会話などを学習する必要がある。教科書の内容などを復習するときに、教科書を見ずに先生英語 (listening) を聞いて、問題を解く。普段の生活の中に英語を取り入れていかなければならない環境を作り、学習していけたらいい。

(4) 考察

生徒の回答には「話すこと」を重視したものが多く、その力を伸ばすための学習で回答が集中したのは、「外国人との交流」「コミュニケーション活動」「会話の練習」などで、これらはいずれも普段の授業の中で少しずつ取り入れてきた内容でもあった。

3. 授業仮説

調査を受けて、次のような仮説をたてた。

①実際の言語使用場面を擬似体験させれば、言語の運用能力を高まり、意味のあるコミュニケーション活動が可能になるだろう。

②コミュニケーション活動を通して、学習の共有化ができれば、互いによさを認め合える学習集団に育つのではないか。

4. 授業実践例

(1) 授業仮説①の例

本校を訪問したバレスティアヒル校(シンガポール)の生徒と3年生との交流授業で「日本の文化の紹介」を Show and Tell 方式で行った。コミュニケーションを成立させるには英語を介さなければならないという状況であったが、生徒は間違いを恐れずに、積極的に英語を使っていた。このように英語を使う目的が明確で、英語でのやりとりが必要な状況下においては、生徒は間違いを恐れず、これまでの習った英語を何とか使って伝えようと努力することが分かった。この努力こそが言語の運用能力を高めるものではないかと思う。また、自国の文化や地域の特産物・祭について調べることを通して、日本の文化を知り、伝えていく難しさにも触れる機会になったように思う。この日本の文化紹介は、今年度の教科書の教材でもあり、異文化理解を養うのに適当な教材であると思う。

(2) 授業仮説②の例

①対象学年と実施時期

対象学年は中学校2年生で、実際に指導にあたったのは1クラス(39人)である。2002年10月31日に実施した。

②授業づくりの視点

Role playing を中心に、他者とのかかわりを生かしたコミュニケーション活動を行う中で、言語の使用場面に即した適切な表現を自ら考え、運用できる力を身につけさせる。

③教材観

週末の予定という生徒にとって身近な題材であり、自分の生活と関連づけて考えることができる。会話を発展・継続させるための表現や技法を身につけ、実践的なコミュニケーション能力を高めるのに適した教材であると考えられる。

④単元の目標

○ role playing を通して、相手の発言に対する簡単なコメントをすることができる。

○自分の週末の予定を相手に話したり、相手の予定を聞き合ったりしながら、相互に関わったコミュニケーション活動ができる。

⑤授業中の活動（一部）

warm-up：1分間スピーチをする。

簡単なカードゲームをする。

● Do you have any plans for this Sunday?

→ Yes, I will go shopping with my friends.

● May I use your pen? → Sure. Here you are.

発展：ペアで会話の流れを考え、発表する。

5. 終わりに

生徒の考える英語力が「話す力」であり、それを伸ばすには実践的なコミュニケーション活動が必要であることが分かった。今後、更なる授業実践を重ね、学習の共有化できる集団に育てていきたいと思う。

分担研究（その5）

「かかわりあいを生み出す社会科授業」の創造
～中学校公民的分野の指導を通して～

1. はじめに

新学習指導要領の公民的分野の指導において配慮すべき点の一つとして「生徒が内容の基本的な意味を理解できるように配慮して、専門用語を乱用したり細やかな事柄や程度の高い事項の学習に深入りしたりすることを避け、日常の社会生活と関連づけながら具体的事例を通して政治や経済などについての見方や考え方の基礎が養えるようにすること。」がある。

とりわけ生徒の日常の社会生活と関連づける学習となると今までのように教科書に記載された事例を扱うだけでは、今の生活から乖離したものになることがある。そこで基本的な事項を押さえながら身近に感じられる課題を提示し、生徒一人ひとりの認識を互いに意見交流しながら高めていく指導が必要となると考えた。

2. 生徒の実態

社会科学学習全般に見受けられる生徒の実態として「難解な語句」に対する抵抗感を抱く一方、「暗記」しさえすれば点が取れる教科という考えを持っている者が多い。そのため、知識の蓄積はあるが、それを深く追究していく姿勢は弱い。しかし課題を与え、時間をかけて自分の考えを整理させるとしっかりとした考えをもっている生徒も多い。

3. 授業の構想

目指す生徒像として①「自ら学ぶことの意義・価値・目標をつかみ、進んで知識を獲得し、自らの思考力・判断力・表現力を高め、問題の解決・未知の事象への探求をし続ける生徒」②「集団の中でこそ自らの学習が高まっていくという自覚を持って、自己の学習を進めるだけでなく、他の生徒の優れた物の見方や考え方、またその態度を尊重できる生徒」③「自己が獲

得した知識や技能は社会（集団）との関係においてこそその意味が生じてくることに気づく生徒」を念頭に置いた。そのためには①「生徒の日常生活で興味・関心がある題材の設定」②「多様な考えが引き出せる学習課題の設定」を中心に指導内容を構築していく。また、発問や課題に対してその場で考えを述べるのがなかなかできないので、授業の中でノートあるいはワークシートに自分の考えを記入させた上でそれを発表し、他者の考えを聞き、自分の考えを検証する方法を取り入れようと考えた。

4. 授業の実際

（事例1）～平等権の学習～

「痴漢防止策としての女性専用車両の導入は是か非か」新聞記事をもとに授業を展開していった。記事には賛成・反対の意見が紹介され、それをもとに自分の考えワークシートに記入させて意見の交流をした。生徒の意見を紹介すると

[賛成 男]

- ・痴漢もしていないのに逮捕され、裁判で経済的にも精神的にも危うくなった人をテレビで見た。痴漢を防ぐための導入なのに反対している女性はいったいどうしたいのかが疑問である。
- ・女性の男性に対する不信感が高まる中、男性の反対意見は現状では通らないと思う。

[賛成 女]

- ・導入は根本的解決ではないと反対という意見に対して、どのような解決策があるのか。減らない被害は絶対に減らしていく必要がある。

[反対 男]

- ・男性が100%原因というわけでもないし、痴漢行為を必ずするというものでもない。分けることが差別にもつながってくると思う。
- ・専用車両を設置しても防げるのは車内だけであって他の場所での痴漢や性被害を防げない。分けることがエスカレートしてしまうのではないか。

[反対 女]

- ・応急処置としてはいいかもしれないが他にも専用とかなできると逆に生活が不便になってしまうのではないか。
- ・分けることは人種差別（白人専用という時代があった）につながるおそれもある。
- ・痴漢をしていない人の方が多いのだから、その人たちが気持ちよく利用できるようにしないと不公平。（家族連れが分かれて乗らねばならないようになる。）
- ・女も自分の身は自分で守るくらい強くないといけない。

男子生徒は「自分が痴漢と間違えられたくないから賛成」女子生徒は「被害にあいたくないから賛成」という意見が中心ではあったが、女子生徒の「根本的な解決ではない。男女の区分けがエスカレートする」という意見があり、男女という立場から少し離れて討議させた。「痴漢行為に対しての罰則が軽いのではないか」「分けることは不便が生じる」など、より良い社会を構築していくためにはどうすれば良いかという課題を考えることができた。

(事例2)～地方自治の学習と自由権～

「東京都千代田区の路上喫煙に対する罰則条例施行は必要か。」

喫煙に関して生徒たちの多くはこの条例施行に賛成と考えたが、マナーの問題としてとらえればいいのであって罰則規定まで必要か。また東京だから人混みで迷惑をこうむる人が多いのであって三原市ではそこまでの必要性を感じないと考えた生徒もいた。

(事例3)～自由権と公共の福祉～

8月頃に社会問題となった「ワン切り業者」による通信障害や「出会い系サイト」の問題などを自由権と公共の福祉の概念を扱う題材として選び、授業を構築した。そのために携帯電話について生徒に事前アンケートを実施した。(時期平成14年10月調査対象者数80名)その結果、現在携帯電話を持っている者15%、近い将来(高校生になったら)持ちたいと考える者57%、不要あるいは当分は必要ないと考える者28%であった。さらに「携帯電話に関して社会問題となっていることは何か」という自由記載項目では持っている者、持ちたい者、不要とした者にかかわらず、上記の「ワン切り」「出会い系サイト」「迷惑メール」等の問題や電車内でのマナー等を指摘した。しかし、「問題に対して携帯電話業者や国の対策を知っているか」という項目に対しては約50%の者が「知らない」と記述していた。そこで教師が業者の立場で「どうしていけないのか。自分にも自由権が保障されているはず。」と課題を投げかけ、生徒の反論を聞くという展開とした。

(事例4)～婚姻制度・平等権の学習～

「現行法では夫婦はどちらかの姓を選ばねばならないがこの制度でよいか」という学習課題を設定し、公開研究会で授業を実施した。まず、婚姻届を実際に提示し、男女ペアを組み、それぞれが話し合っただけで婚姻届の氏を選択を行わせた。男性の氏を名乗るものだと思いきこんでいた女子生徒もいたが、20組のペアのうち、6組が妻となる者の氏という選択をした。選択理由として、「僕は次男で相手が一人っ子なので」「僕の氏すると妹と同じ名前なので困るから」「相手(妻)の

方が今の氏よりいいと感じたから」などであった。次にいずれにしても氏が変わることで不便になることはないかという課題に対しては、「仕事をしていたら次の日から名前が変わったりして不便かも」「銀行口座等を変更するのが大変かも」「結婚したんだからそれぐらいの不便は不便ではない」などさまざまな意見が出された。

学習課題の「夫婦別姓」について事前に教育実習生へのアンケート(調査対象70名)を実施し、その結果を生徒に提示しながら若い未婚の人たちの考えを参考にしながら考えさせた。

授業後の感想を見てみると、婚姻(結婚)そのものが中学生にとっては興味はあるものの直面しているのではなく、考えもどちらかといえば情緒的であり、男女共同参画社会が叫ばれている中でこの課題を考えることは難しかった生徒が多かった。そうした中で、実習生の意見については、若者の動向を知るという点で大いに参考になったという感想も寄せられた。今後調べたいこととして「別姓になった場合の子どもの氏はどうなるのだろうか。」「外国ではどうなのだろうか。」「という意見もあった。また、今回、男女ペアを機械的に組んだが、実際に自分が直面したときは今日よりももっといろんな条件を考えながら結婚しなければならぬという感想も寄せられ、社会の動き(民法の改正など)の動きを見たいという新たな自己課題を発見した生徒もいた。

5. 今後の取り組みに向けて

今年度、担任として学級集団作りを直接担当することはなかったが、全学年の授業を担当することで社会科の学習における学習集団はどうあるべきかを各学年、各担任との連携のもと追究してみた。学年が上がるにつれ討議などの手法が身に付き、その内容もより論理的になるよう指導してきたが、現実はその逆で、学年が上がるにつれなかなか全体の中での意見交換や討議ができにくい実態であった。

3年生の取り組みを今回考察してみると、できるだけ身近なテーマをとりあげて生徒にレポートを書かせることと個々はそれぞれ自分の考えを抱いていることがわかった。それを授業の中で互いの考えについて批評したり、賛同したりする場面の設定が少なかったように思う。研究会での協議会でも指摘された点として、ディベート手法の導入や他者のレポートに対して批評等を加えるような時間を設定することでさらに学習集団が高まっていくと考える。今後の取り組みに生かしていきたい。

Ⅲ 結語

今年度の共同研究では、「学びの準拠集団としての

学習集団と自立的な学習者の育成に必要と考えられる4つの領域を統合すれば、当該集団と学習者に学習動機と学力形成に有効となるであろう。」という仮説を実践的に検証するため、学級経営、保健室経営、数学、英語、社会の各教科において、それぞれに指導と評価をおこなった。

その結果、学習動機や学力を形成するためには、①認知領域、②情意領域、③精神運動領域、④相互作用領域、の4つの領域を統合的に扱うことが、有効であることが分かった。

次年度は、各教科の学習指導の中で、よりいっそう具体的に、4領域の統合が図られるように研究を進めて行きたい。

今回の共同研究では、教育学部の縫部義憲先生、三原学園の小原友行校長先生、金丸純二副校長先生、附属小学校の神津弘之先生にお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

〔参考文献〕

縫部義憲 1986 教師と生徒の人間づくり (第1集)

- 歴々社
縫部義憲 1987 教師と生徒の人間づくり (第2集)
歴々社
縫部義憲 1989 a 教師と生徒の人間づくり (第3集) 歴々社
縫部義憲 1989 b 教師と生徒の人間づくり (第4集) 歴々社
縫部義憲 1999 教師と生徒の人間づくり (第5集) 歴々社
縫部義憲 2001 日本語教育学入門 歴々社
縫部義憲 2002 多文化共生時代の日本語教育 歴々社
今川卓爾 2000 私に影響を与えた人・仕事エンカウンターで総合が変わる 図書文化
今川卓爾 2001 総合的な学習の実践と評価 国際理解 指導と評価11月号 図書文化
今川卓爾 2002 学力の形成指導と情報開示にNRTとCRTを活用 標準学力検査を活用した実践教育 (6) 指導と評価11月号 図書文化